

恩納村「シンカプロジェクト」研修

農業委員 眞道 克

沖縄県恩納村役場にて担当者より説明を受ける。

「シンカプロジェクトとは」

レタスの一大産地の長野県川上村より、レタスの栽培技術指導を受け、恩納村で産地化を目指す。恩納村内のホテルや飲食店へ出荷し地産地消も推進していく。

シンカプロジェクトの「シンカ」とは沖縄の方言で「仲間」を意味する、シンカヌチャーから由来する。

シンカプロジェクトの始まり

川上村は標高 1,500m の高原地帯で、夏期には高原独特の冷涼な気候を利用した日本一のレタス産地です。しかしながら、冬は -20 度になる事もあり、広大なレタス畑は雪に覆われてしまいます。

一方で、恩納村の夏は亜熱帯気候で暑く、レタス栽培には適さない気候ですが、冬の気温は 20 度前後と川上村の夏と似ている。

今まで、恩納村ではパッションフルーツやアテモヤの果樹の他、小ぎく、切葉、観葉の花き類やサトウキビなどを栽培していたが、レタス栽培は行っていません。

レタス等の生鮮野菜を栽培することは、農地の有効活用や農業の効率化の為に有効ですが、野菜栽培の技術や経験が少なく恩納村として大きな課題でした。恩納村の冬の温暖な気候と自然豊かな大地のもとで、川上村の長く培った野菜栽培技術を活用してレタス栽培に取り組むプロジェクトが（シンカプロジェクト）です。

（このプロジェクトは、恩納村の若者農業者の就農や遊休農地の有効活用と川上村農業者の栽培技術の研鑽と農業を核とした自治体交流の推進を目指しています。）

シンカプロジェクトの現在

平成 28 年度 16 名、平成 29 年度 12 名、平成 30 年度 6 名、令和元年度 5 名、令和 2 年度 4 名、令和 3 年度 2 名、令和 4 年度 2 名

残った生産者の栽培技術は向上しているが、気候、有害鳥獣、販路拡大に

課題が残る。

課題①気候

レタス栽培に沖縄の冬の気候は適しており、しっかりとしたレタスを栽培することは可能であった。

現に、沖縄県本島南部の糸満市は産地としてレタス栽培に取り組んでいる。しかし、恩納村で栽培を行う上で北風の影響が大きいことがわかった。

圃場によっては風速 20m～30mが 2 日間続き、潮風による影響でレタスの外葉が枯死してしまう現象が続いた。(600 坪)

また日照不足が近年発生しており、発育不良が発生している。

課題②有害鳥獣シ (タイワンシロガラシ)

冬になるとタイワンシロガラシという鳥がレタスをエサとして圃場に現れる。定植直後の苗から出荷まえのレタスまで食害を発生させる。

防鳥ネットを設置してもらっても風の影響で破れることも多く、対策に苦慮

課題③販路の拡大

出荷はおんなの駅なかゆくい市場を通じて「シンカレタス」として販売している。

当初は村内に多数存在するリゾートホテルのレタス需要を見込んで、地産地消推進と合わせてホテルへの出荷を想定していた。

シェフのレタスに対する評価は高く、シェフの意見は仕入れを希望するが、ホテルの購買担当はカット加工され消毒洗浄されたレタスを求めていることがわかり、仕入れにあたり大きな壁となっている。

玉レタスとして仕入れるホテルもあるが、多くはカットレタスを求めている。

他の販路として青果事業所を通じてコープ沖縄に出荷を行っているが、出荷量が安定せず希望数量に及ばず出荷できない場合もある。

また、青果事業所やホテルに出荷できなかつたレタスはおんな駅なかゆくい市場で販売しているが、売り場が飽和状態となり価格が下がる現象が起きた。

シンカプロジェクトの今後

今後の取り組み

- ① 生産者の増加
- ② 安定供給体制の構築
- ③販路の拡大

以上 3 点を改善できる取り組みを検討していく必要がある。

作付け品種 ラプトル

1軒あたりの年収 400～500万円

本年のレタス就農者2名の年齢 60～70才 高齢化が深刻です。

発足時には、若者も何名もいたそうですが。

ある程度の収入無いと、若者の就農は難しいかもしれません。

圃場の見学に行きましたが、耕作放棄地がかなりあちらこちらに見られた。

レタス畑には出荷前のレタスが有りましたが、見た目みずみずさが無い様に見受けられた。

灌水設備が原村のようでは無い為もあると思われました。

15地区は灌水設備が無く、6地区は灌水設備が有るとの事でした。

苗づくりは、説明してくれた役場職員が担当しているとの事でした。

恩納村の農家は夏はマンゴー、冬は野菜を出荷しているとの事でした。